

---

# ある、別次元の話・・・

かずき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある、別次元の話・・・

### 【コード】

N3080V

### 【作者名】

かずき

### 【あらすじ】

これは、ある少年の別次元の物語

## プロローグ(前書き)

初めての投稿です！

まあ、gggggなところもありますが宜しく願いします

## ブローグ

その日は、雨で

僕はガレキの中にいた。

朝起きると同時に目覚まし時計がなる  
最近いつもこんな感じだ。

しばらくしてから僕はベットから降り

リビングに向かった

・  
・  
・

リビングに向かうとまずテレビをつける

丁度天気予報だ、

「えー、今日は 地区、 地区は

大雨警報が出てますので十分にご注意下さい。」

雨・・・か・・・

今日は、学校は休みだな・・・

休みだと思つと僕は、PCをしようとする自分の部屋に戻る

見る順番は

・メール

・StepMania

・掲示板

だ。

メールを早速見ると・・・

げっ、迷惑メール57件!?

酷い件数だ・・・

削除すんのメンドクセー

後にしよう・・・

その後はStepManiaを楽しみ  
掲示板を見に行く

・  
・  
・

誰が作ったのかわからないこの掲示板

自分が見た掲示板は

学校の掲示板だった

一応いつとくぞ

裏サイトとかそういうのではないからな。

早速見ると

『学校休みだああ!!』

などというコメントがたくさんある。

そんな中俺はあるコメントに目を通した

『おい、しってるか？

この大雨警報明日まで続くらしいぜ

しかも、明日地震が来る恐れがあるんだってよ

おお怖い怖いwww』

・・・確かに怖いな いや、まずありえないだろう

そんなことを思いながら俺はPCを終了する・・・

## プロローグ（後書き）

プロローグ終わり！！

いやあ、うん、なんか、おもしろくなってきましたよww  
見てくれたユーザー様！ありがとうございます！！  
そして1話も見てくれればありがとうございます！！

「……どっ?」(笑)(前書き)

「話でー……す!!」

「今回の話で主人公の名前がわかるんだよ!!……うん!!……全部みてくださればうれしい!!」

「うん・・・どっ？（笑）」

次の日・・・

掲示板に書かれていたことが当たった・・・

俺の名前は「椋」（むく）

年齢は14だ。一人の妹がいる。

まあ、プロフィールは作者に任せるとして・・・

外は大雨、テレビをつけると警報がでていているという・・・

ここまでなら普通の人には「あー今日も休みだな」

とかおもうであろう。だが・・・だ、昨日掲示板で見たことを実は  
気にしていたのである。

『地震が起きる』このことだ・・・果たしてくるのだろうか・・・

うーむ気になる・・・

7

・  
・  
・

彩香「にーちゃん」

椋「ん？」

（こいつは彩香俺の妹だプロフィールはさくら）  
）

彩香「朝ごはん食べないの？」

椋「今は・・・な・・・後で食べるよ」

彩香「うん、わかった」



そうしてどっかに行ってしまう

あー、朝飯かーそういえば食うの忘れてたな・・・  
とか思った瞬間！

グラグラと家が揺れだした。

こりゃ地震だな・・・でもどうせ小さいだろうな・・・  
などと思っていたら一気にどーんと揺れだした

棕「やべえやべえやべえ!!」

彩香「にいちゃん!!」

棕「彩香!!非難しと・・・」

・  
・  
・

家が地震で崩壊した・・・

そして自分の記憶はここで途切れた・・・

「うっ……どっ?」(笑)(後書き)

プロフィール

棕 14歳 男

好きなもの

「パン」

彩香 12歳 女

好きなもの

「なんでも!」

作者「なあ……俺、結構これからいろいろやらされる気がする……」

棕「勿論そっだが?」

作者「テ……テメエ……」

目覚めるとそこは・・・(前書き)

やっと二話だよWWW

なんか、いろいろやっててかかなかつたし・・・

まあ、たのしんでみてください

目覚めるとそこは・・・

女の人が自分に何かを訴えてるような夢を見た

自分は・・・なにも・・・わか・・・

・・・

目覚めるとそこは、良く分からないばしょであった・・・

ここは・・・どこなんだ・・・今わかることは自分の家ではないということだけ・・・

？「目が覚めた？」

「！！？」

そこには、『ああー謎が多そうだなコイツは』みたいな女の子が立っていた。

？「私が、トラックにこう・・・なんか・・・ドカーン！！ってなりそうな時に助けたんだから

感謝しなさいよ」

「えーつとだな・・・ちょっと聞きたいことがあるんだが・・・

お前はだれだ？そしてここはどこだ？」

？「私？ 私は『シスカ』っていうんだ」

目覚めるとそこは・・・（後書き）

「ものすごくみじかくなってもった・・・」

棕「これはどういうことだ？」

「あー、スイマセンwww」

棕「スイマセンで済むとおもってたんのかああ！！」

「具アアアアアアアあああああああああああああ」

## 謎のシヨウジヨ (前書き)

長めにかけるように努力するぞー！ー

## 謎のシヨウジヨ

棕「シ・・・シスカ？」

シスカ「うん」

棕「君が僕を？」

シスカ「そっだよ」

棕「んで・・・ここはどこなんだ？」

シスカ「ここ？　ここは私の家だぜ？」

棕「いや・・・そういうことじゃなくてだな・・・」

シスカ「あー飯？　ちょっと待ってな、持ってくるから」

棕「えっ・・・あの・・・」

・  
・  
・  
話を・・・聞いてくれよおおおおお！！！！！！

シスカ「まあ、腹へってるもんなあ・・・1週間たってんだもん」

棕「え！？い……1週間！？」

シスカ「おいおいー最初に言っただろ？」

棕「すまん……言われてないんだが……」

シスカ「あれ？そうだったけ？アハハ八八ごめんごめん！！  
まあ、これでも食ってくれ！ な？」

渡されたのは『シチュー』だった。ものすごくいいにおいがする……

棕「うん……おいしい……ありがとう……」

シスカ「お前……家はどこなんだ？」

棕「……まず教えてくれ……ここはどこなんだ……」

シスカ「ここ？ ここは『サウバタウン』なぜかは分からないんだ  
けど

みんなそうよんでるよ」

棕はシスカに助けられるまでの出来事を話した  
話し終わるとシスカはちよつと俯いてこういった

シスカ「お前、帰る場所なかったらさ。ここに住まないか？」

棕「え……いいのか？」



シスカ「ああ、いいぜ、俺も一人暮らしだし、部屋はいっぱいあるから・・・な？」

棕「あ・・・ありがとう 家の掃除とか、なんでもする」

シスカ「別にいいって!! まあ、よろしく!!」

この日から、俺とシスカの暮らしは始まったんだ・・・

謎のシヨウジヨ（後書き）

「シスカのことどう思うんだ？」

棕「不思議な女の子」

「へえー（ニヤニヤ）」

棕「……って……テメエ……」

シスカ「おーいむくうー」

棕「ん〜今行くーからー」

「まあ、お幸せにWWW」

棕「お前ちよつとこい」

「ぎゃあああああああ！！」

## 町のこと(前書き)

違うほうにいどうしようかな・・・

ノベスタとか・・・

涼「俺もそっちのほうがいいとおもっぞ」

じゃあそっちで今回は短め

まあ、いつも短いがwww

## 町のじよ

シスカの家で暮らすことになってから一週間。そういえば自分はまだ『サウバタウン』（だっけ？）

のことをよく知らない・・・今日教えてもらっか・・・

・

・

・

（晩飯）

棕「・・・なあ、シスカ」

シスカ「ん？なんだい棕」

棕「サウバタウンについて教えてくれ  
ここはどういう町なのかを」

シスカ「え!？」

棕「シスカはいきなり驚きだす・・・」

・

・

・

シスカ「こ・・・ここは、サウバタウンじゃないぞ?」

棕「え!？」



## シヨウジヨから話されたコト（前書き）

棕と決めたところ移動しないことに決定しました。

（だれもみていないと思いますけどもすいません）

棕「だれもみてないとかそういう悲しいことは言つなWWW  
「

## シヨウジヨから話されたコト

棕「ここは『サウバタウン』じゃない？どついつことだ？」

シスカ「あれ？前に言わなかったっけ？」

棕「言っていないぞ」

シスカ「それはごめんな、まあ、話すときかな、うん」

棕「話すとき？」

シスカは深呼吸をしてから俺を見て  
サウバタウンのコトを話し出す

シスカ「ここは『サウバタウン』よりものすごく離れたところ  
あっちの人が来ることはめったにない・・・いや・・・いないかな？  
まあ、田舎だよ田舎」

棕「ここが・・・田舎・・・そうとは思えない」

シスカ「だろ？けどあっちはもつとすごい・・・みてるると嫌になる  
ぐらいな・・・」

棕「なんで、シスカはここに住んでるんだ？」

シスカ「！！！！」

棕「？」

シスカはいきなりびっくりした表情でこっちを見た。  
そして、俯いてこういった

シスカ「『コノコト』を聞いたらもうお前はここの町にはいけない  
ない

だが、これは聞いてほしい」

棕「・・・わかった・・・」

シスカ「私は・・・あつちじゃ『犯罪者』だ・・・」

シスカはこのことを言うときいきなり泣き出してしまった

それもそうだろう。こんなことをいきなり聞いて

通報をされるかもしれない・・・けれどシスカは

俺に話した・・・

棕「・・・そうか・・・シスカも大変だったんだな・・・」

シスカは泣いたままだ

棕「・・・俺は『サウバタウン』へ行くよ・・・」

シスカは今にも消えそうな声でこういった

シスカ「『ハンザイシャ』がああの町にいますと言いつても行くんだろ？」

棕「いいや、言わない」

シスカ「!!！」



棕「俺はシスカに助けられた。しかも、こんな優しいやつが『ハンザイシャ』とかはまずないと思う。

だから、俺は、何故『ハンザイシャ』なのかを調べに行く。シスカもしらないんだろっ?」

シスカはうん、うんとうなずく

棕「多分またいつか戻る。そのときはここに来ていいか?」

シスカ「うん!」

なきながらそうシスカは答えた

棕「しかも、自分は何故この世界に来たのかも気になるしな・・・」

シスカ「・・・聞いていい?」

棕「ん?どうした?」

シスカ「助けるときに見ただけ。右肩のアザ・・・多分力になるから・・・」

ん?アザ?力?よくわからん・・・

棕「あ・・・アザ?」

シスカ「わかんなかったらそれも調べるといいよ、ちなみに星マー  
クだよ」

棕「ああ、わかったありがとう」

シスカ「サウバタウンはこの家をでてまっすぐ行くとすぐわかるから。」

棕「ありがとう・・・いつてくるよ。」

シスカ「ああ！、またいつでもももどってこいよー」

そうして俺は、サウバタウンに行くことにした・・・

シヨウジヨから話された「ト」(後書き)

「やっと自分が思ってたところまで行けた・・・良かった良かった・・・」

棕「おめでとうだな。そのことは」

〈裏話ターーーーム〉

棕「なんじゃこりゃあ!」

「ハイ裏話タイムです!それでは言わしてもらいます!」

・シス力は偶然出てきたキャラ

棕「エエエエエエエエ!」

「それでは、次回もよろしくおねがいします」

## 旅（前書き）

一回全部読み直しましたwww

うーん、前回がちよっとおかしい感じになったけど

まあ、いいかなっ！っておもってますwww

まあ、今回もよろしくおねがします



そんなことを考えて自分の記憶はそこで途切れた・・・

旅（後書き）

「ついについたねー」

棕「ああ・・・」

「まず何したいの？」

棕「そうだな・・・シスカと連絡を取れるものかな・・・」

「・・・えWWW」

## サウバタウン(前書き)

どうも、かずきです。

今「パンダヒーロー」を聴きながら頑張って書こうと思っています

WWW

まあ、変な目・・・じゃなかった・・・

温かい目でみまっていただければうれしいですねWWW



## サウバタウン

目覚めるとそこは、さっきのものすごいところじゃなく。  
薄暗いところにいた・・・

棕「あ・・・頭痛いな・・・」

嫌なおいがする。だれか人はいるんだろうか・・・  
というか。自分は何故こんなところにいるのだろうか

棕「とりあえずうつろついでみるか・・・」

そう思いいろいろ歩いてみる・・・

棕「ここは・・・」

最初に見つけたのは、薄暗くてよくわからないが。人工的な山のよ  
うなモノ

目の前にいろいろなものをあわせて作った階段がある。

棕「のぼってみるか・・・」

そう思い、のぼってみることに・・・

上についてやっと分かった・・・  
向こうのほうにさっきまでの『サウバタウン』が見える。  
あたりを見回してみると、ここ 自分がいる場所はごみや  
ガラクタだらけ・・・

そこでひとつだけの明るい光を見つけた・・・  
どうやらガラクタで作った家みたいなところからだ・・・

棕「・・・なにか心配だが行ってみるか・・・」

？「・・・このコピーして・・・んでここに張ってっ・・・  
とりあえず。テストしてみますか・・・」

そこには、何週間も引きこもったようなオーラがある。  
自分と同じ年ぐらいか？そんな男がいる・・・

棕「なにをしているんだ？」

そう思いちよつと足を踏み入れると

『Intruder discovery. Intruder  
discovery.  
Does the person on the inside  
criticize right now?  
Please defend the have you wit  
h the gun etc.』

いきなりブザーが流れ英語が流れた

棕「うおおー！」

？「？だれだ！？」

棕「怪しいものではない！とりあえずこのブザーを！」

？「ああ・・・すまん」

ブザーが止まった・・・

？「んで・・・なんできた？だれにつれてこられた？」

棕「お前が俺を助けたんじゃないのか？」

？「んー？たすけてない・・・ああ・・・っそういうことか・・・  
お前も災難ってやつだな」

棕「え？」

？「あの町は、人をすてるんだよそしてお前は捨てられた一人。まあ、よかつたじゃんこつちの

ほうがいるいろしてもあつちにみつきりにくい。名前を言ってなかったな・・・

俺の名前は『雄翔<sup>ゆうせう</sup>』だよろしく。」

棕「棕だ・・・よろしく・・・町というのはサウバタウンのことか？」

雄翔「ああ、そうだけというかお前はどこからきたんだ？」

棕「・・・んー、ここで言うなら『別次元』っていったらいいかな・・・」

雄翔「詳しく聞かしてくれよ今日はとまっていからさ。」

・



着いていくとバーみたいなのところに着いた。バーの名前は……さび付いてわからないな  
だが新しい看板は見えるな……

『情報・com』

なんだここ……

雄翔「ほらほら。はやくはいるぜ」

?1「よあ、なにか情報あるか？」

雄翔「ないよお前もなにかあつめるよ」

?2「おっ！そこあたらしいの！麻薬いるか？安くしとくぜ。」

雄翔「やめろ、そいつに変なことはするな。」

棕「すごいところだな……ここ……」

雄翔「ここは、情報・com 情報があるやつに情報を売ったりする。

中にはさっきの麻薬も売るやつもいるけどな……」

棕「そうなのか……」

雄翔「おい。Zはいるか」

?1「あっちにいるぜ。ほらいつもの暗号部屋」

棕「あん「ごべや?」」

雄翔「ある暗号をおさないとはいれないんだ・・・まあ、自分のばあいはコレをつかうけどな。」

そうして、袋からUSBとパソコンをとりだした。すごく小さいパソコンだ・・・

雄翔「このUSBはハッキングをするためのだ」

棕「できるのか。」

雄翔「師匠にもらったやつだ。まあ、それをいじってけっこうすげーいやつにしたけどね。」

んで、さっきいじってたんだ。何週間も引きこもって。」

棕「(やっぱり引きこもりか・・・)師匠?だれだ?それは、」

雄翔「ハッキングを覚えてもらったひとだよ、んでこのPCはものすごくスペックが悪いとしいやつ

を組み合わせたもの。小さいのは持ち運びやすいため。

容量はとりあえず3000万TBだ」

棕「けっこうすごいんだな・・・」

雄翔「まあね、よしはじめますか!」

3秒後

雄翔「よしできた扉ひらいてごらん」

棕「はやいな・・・」

そうして開いてみると・・・

ある男が立っていた。

？「雄翔・・・3秒は遅いぞ」

## サウバタウン（後書き）

「今日は長いと思う」

棕「よくがんばったな。」

「ふはははは、あと、こんかいからある日時に投稿することになりました。」

それは毎週日曜日午前0時です。」

棕「てなわけよろしく」



## お知らせ＝番外編とよんでもおk

「どうも、かずきです。」

棕「棕だ。んで、かずきよ……いったいどういことだ？これは、」

「そついえばと思ってだな……棕たちのプロフィールを出そうかと……。」

棕「前にも出さなかったか？」

「あれよりすごいものをさ！」

棕「おおおおおおお……！」

「というわけで今回は『プロフィール』です。こんなかんじにやっています。」

名前」

趣味」

好きなもの」

特技」

作者について」

棕「なにかいらないものがあるぞ。」

「ってなわけです」と

名前「<sup>むく</sup>棕」

趣味「StepMania」

好きなもの「パン」

特技「ステマニ フルコンで全部マーベラス」

作者について「まあ、あれだいろいろ変人だがいいやつかな・・・  
ステマニはまあまあだな」

名前「シスカ」

趣味「家具集め」

好きなもの「シチュー」

特技「早く寝れる」

作者について「よくわかんない」

名前「雄翔」

趣味「食べる」

好きなもの「自分がいるところ」

特技「ハッキング」

作者について「PCのこととかもうちよいわかってほしいね。  
でもよくわかんないな・・・こんどあとがきに出させてくれよな！」

棕「いまのところでてるやつらだな。これからどんどん増えるのか  
？」

「あー増えるよ増えなきゃ楽しくない。」

棕「お前のことシスカは良くわかんないそうだな」

「けしてやろうか!!」

棕「あと、こんど後書きにでたいってさ雄翔が」

「じゃあ、こんどから オレ 棕 雄翔 の3人か」

棕「もうレギュラーかいな」

「ふふふ、ちなみにこんかいのあとがきはないぜ」

棕「というわけで。」

か・棕「さようならー」

Ｚと名乗るもの（前書き）

雄翔「あつ、俺前書き担当？」

「いやちがう、とりあえずあとがきもこんなのだといたいたんだ」

雄翔「なるほどね」

## Zと名乗るもの

3秒がおそい・・・

普通なら何分かけてハッキングをおこなう・・・

だが雄翔の場合は3秒だそれがおそい？なにを言ってるんだ・・・

？「そつちのはだれだ？」

雄翔「ああ、捨てられたやつだ。もともとの出身は『別次元』帰る方法がわからないからここに入るんだとさ。」

掠「名前は掠です。」

？「ほう・・・そうか・・・が入るのはいいがお前にも情報を集めてもらうぞ。」

自分だけはだめだからな。」

掠「わかっている・・・そのくらい」

？「よろしい・・・私の名前は・・・『M r・Z』このやつらは私をそうよんでいる・・・」

雄翔「よかつたな。」

掠「ああ・・・」

ここで、かえる場所を探そうか・・・

いや、でもあの町のこと。シスカの『犯罪者』も気になる・・・  
そのことも調べるか・・・

雄翔「じゃあ、そろそろ帰るぞ、ほら帰るぞ。」

棕「ああ、わかった。」

・

・

・

・

雄翔「さてさて・・・お前がこれから一緒だと寝る場所作らないとな。」

棕「すまない・・・」

雄翔「別にいい。こいつに任せる。」

棕「こいつ？」

雄翔の手には『スマートフォン』などというものがあつた。

雄翔「コイツはな、この部屋とリンクしているんだ。だから、指一本で家具の配置をしたり

部屋を増やしたり・・・なんでもできるんだぜ？もちろん隠し部屋とかもな。」

棕「あるのか？隠し部屋・・・」

雄翔「さあて、どうだろうね。さてお前の部屋は・・・ここがいいかな。」

そういうといきなりガラクタが動き出し。きれいに小さいスペースが開き。

そこに階段が現れた。

雄翔「結構広いから。そこにしな、家具とかもとりあえずおいてるから。」

好きに使い。」

棕「本当にありがとうな雄翔・・・」

雄翔「別にいい・・・というわけで俺も仕事があるし。お前は部屋で休んどけ。」

棕「ああ、そうする。」

部屋に行く・・・ベット、机、棚、そんなものがおかれていた。

棕「もの凄く広いな・・・とりあえず今日は休むか・・・」

そうして新しい部屋で休んだ。

・  
・

・  
・

? 『お前は、まだわからない．．．』

棕 『なにがわからないんだ？』

? 『わからない．．．』

棕 『なにが言いたいんだ．．．』

? 『わからない．．．』

棕 『おい．．．』

? 『お．．．ま．．．えは．．．ちが．．．世界．．．に．．．』

棕 『だからなんなんだ!!』

そこで、めがさめる．．．夢だ．．．自分は夢を見た。あいつはだれなんだ？

なにをいつてるんだ？．．．あいつは．．．だれなんだ？



Zと名乗るもの（後書き）

雄翔「初めてここにきたぜ！」

「だな。これからはこの3人か。」

棕「そういうことになるな。」

「あとは、見る人がいればなんだがなWWW」

棕・雄「さみしいことを言うな。」

## 1117での暮らっ

朝

自分が寝ているところは朝がどうかわからないので、間ざまし時計で起きる。

棕「あのベットものすごくいいな・・・」

雄翔「んお？ 起きたか、おはようお前はやいなー、」

棕「雄翔はどうなんだ？」

雄翔「昨日から・・・いや、もっと前からかな」

棕「おいおい！体を壊すぞ・・・」

雄翔「そういえば・・・か・・・体が・・・重いな・・・あれ・・・」

バッターン！

棕「大丈夫か！？・・・寝てるな・・・」

・  
とりあえず、雄翔をベットまで運んだ、起きるのは結構後だろう・・・

棕「さて・・・そういえばここはどんなところかまったくわからんな・・・」

散歩でもするかな、体もまだ変な感じだし。」



そこには、みなさんがしっているあのものではなく、自作だ・・・多分、あれをまねしたのだろう。だが、ぜんぜんにそっくりだ、ちがうところは、すごいきれいなデザインだ、

・ 棕「これは、もらっていいだろう、ごみにまぎれていたし・・・さて、これはなんて呼ぼうか・・・」

・ 棕「まあ、いいかあとで決めよう。」

#### 特徴

・ きれいなデザインが回りにある。

・ みんなが知っているりんごの代わりに

白黒曖昧な人がプリント？されている。

・ 容量は・・・『IKURADEMO OK』とかかかっている。

・ 棕「さて・・・次はどこに行こうかな。」

・ 棕「音楽プレイヤーのようなものは見つからなかったな・・・そろそろ帰るか・・・」

いつのまにか昼をとっくに過ぎていた。

棕「ただいまー、」

・  
・

雄翔はまだねているか・・・

自分の部屋にはいり、さっきのプレイヤーをPCにつなぐ・・・

棕「えーつと入っている曲は・・・『パンダヒーロー』・・・一曲  
だけか・・・

ために聴いてみようか・・・」

とてもいい曲だった、なんだかあの白黒曖昧な人が頭に浮かぶ・・・

・  
・  
『夕方 雄翔の家』

・  
・  
棕「さてさて、今日は絶対に雄翔は起きなさそうだし、体が痛いし・  
・  
ものすごく早いが寝るか・・・」

・

・

・

そういえば・・・ごみ処理場でCDを見たような・・・

「」での暮らし（後書き）

「かずきは、宿題でいそがしいし……雄翔はねてるし……」

「きたぜ……」

「大丈夫なのか？」

「ああ……」

「と……というわけで……」

「か「次回もお楽しみに！」」

番外編 作者の愚痴を掠たちが聞くコーナー

「なんで、こんなもの書いているんだろうな……」

掠「お前が勝手にきめたんだろ……んで……どうなんだ?」

「どうなんだって?」

掠「カラオケ」

「うわあああああああああああああ!」

解説コーナー

Z「なんで……俺が……まあいい……  
軽く説明するとだな……」

・先輩にカラオケに行かないかと誘われる  
・前回は親の反対で無理だったが今回は期末テストでの点が60点  
いじょうならOK

・勉強は一応している  
・塾めんどい  
・そしてこういう……  
「60なんか……無理じゃね?」

Z「こんな感じだ……」

解説コーナー 終了





「毎週はまじやめぢいと思っ。」

「あ、どうした？」

「あ、そうだ」

完

ま は ん へ い が ん ば

棕「おおお・・・おっ」

「いつか話す」

棕「なぜ!？」

く

づ

つ

だ

ま

だ

あそこは何なんだ？

次の日、

『悠翔の家』

朝起きるとふとこんなことを思う…

そつえば、サウバタウンは、どんな所なんだろう…と

部屋をでてリビングに移動、悠翔の様子はどうか見に行こうとすると

ガタ…ガタ…

悠翔「あー、よく寝た掠ー、いるか？」

久しぶりに悠翔が喋るのを見た

掠「ああ、やっと目が覚めたのか。おはよう」

悠翔「おう、さて久しぶりの朝飯でもくうか！」

く昼く

『悠翔の家』

悠翔「サウバタウンはどんな所かだつて？」

掠「ああ、俺はあそこに行ったことがない。見たというと、サウバ

タウンの門だけだ…」

悠翔「じゃあ行くか？」

棕「え？」

〈昼〉

『サウバタウン（入り口）』

棕「うーむ…」

〈昼〉

『悠翔の家（サウバタウン入り口出発前）』

悠翔「俺の友達に頼んどくから、」

棕「いいのか？」

悠翔「ああ、どんなところか見てこい。」

棕「ありがとう」

悠翔「じゃあ、場所はここな、」

悠翔に地図を渡された。  
棕「じゃあ行つてくる」

（昼）

『サウバタウン（入り口）』

棕「（一体どんな人なんだ…？）」

？「あんたが棕ね。」

棕「え…？」

あそこは何なんだ？（後書き）

「ひさしぶりだww」

棕「まったくだな」

「最近は携帯で打ってたしてるからねww」

棕「ほう・・・」



## 案内人

? 「あんたが掠ね。」

掠 「え…?」

そこには、フードをかぶった男が立っていた。  
…いや、男にしては声は高いし、女だろう…

掠 「どちら様で?」

? 「悠翔に、案内人がいるとか言われなかった?」

掠 「それがあんたか」

「そうよ、悪い?」

掠 「いや…別にいいが…」

掠 (なんか言うとすぐ怒りそうな感じだな…)

・

・

・

? 「紹介するの忘れてたね、あたしは…まあ、『ヒル』とでも呼んで」

棕「ああ、よろしく、ヒル」

ヒル「ああ、じゃあ行きましようか。」

棕（フード脱がないかなあ…）

ヒル「あつ、気になるの？私の顔」

棕「え！？」

どうやら読まれたらしい…

ヒル「でも見せたくない」

棕「…」

案内人（後書き）

「女キャラ登場」

棕「まあ・・・やさしそうだとは軽く思った」

「というかこの時間に一揆にだすか!」

棕「そうだな、がんばれ」

「やっぱり俺一人の作業か・・・」

## サウバタウン再び

ヒル「じゃあ、まず何から教えようかな…」

棕「なんでもいいぞ」

ヒル「それじゃあ……」

く  
唇

『サウバタウン 転送場』

ヒル「これはすごいんだぜ！」

棕「これは？」

ヒル「これは転送装置だ！どこの国でもいける。でも最近では違う世界もいけるらしいぜ？」

棕「違う世界？」

ヒル「ああ、例えばお前の世界とかな……」

棕「！何故知っているんだ？」

ヒル「悠翔から聞いたよそれより…いつてみなよ元の世界に」

棕「ああ…分かった」

これで帰れたらそれは有り難い…だがまだ俺にはやることがある。  
…まあ一応やってみよるか…

作業員「welcome!まずあなたの情報を見させて頂きます」

ヒル「…そうだった。棕!逃げ…」

いきなり大きなベルがなる

作業員「おーい!こいつ指名手配犯だった!つかまえる!」

棕「え!?!」

ヒル「いくぞ!」

指名手配などといわれたが まさかこれが…

ヒル「あー、危なかった…」

棕「ヒル、なぜ指名手配と?」

ヒル「お前、一回ここにきて気絶したろ?。」

棕「ああ…」

ヒル「それは、この街の政府がお前を認めてないということだ」

惊  
…  
」

サウバタウン再び（後書き）

「まー思っんだがこの作業員くずだよなWW」

「 惊」

「落ち込むなってーWW」

## 指名手配という物

棕「政府が…」

ヒル「まあ、あれだ。そんなに落ち込むことは無いぞ？取りあえず分かったことはお前は認められてはいないと言っことだ」

棕「…」

ヒル「んー、…あつ！  
そうだ！」

棕「どうした…？」

ヒル「今のお前の重い空気を変える場所があつたぜ！」

棕「お…重いつて…」

まあ、たしかにそうかもしれないが…」

ヒル「まあ、ついてきな！」

・  
・  
・

棕「…」



見せられたのは物凄く綺麗な夕日だった…

ヒル「凄いだろう？俺しか知らない場所何だぜ？」

棕「ああ…とても感謝だ…」

それから沈むまで自分は夕日を眺めていた。

・

・

・

ヒル「楽しかったか？」

棕「ああ、ヒルのおかげでな。」

ヒル「そっか！じゃあまた案内してもらいたかったら連絡くれよな！」

棕「ああ、分かった今日はありがとう…」

指名手配という物（後書き）

「今日は・・・俺の都合上でいろいろかけない・・・すまん・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3080v/>

---

ある、別次元の話・・・

2011年10月10日14時14分発行